

1-2-4a科学

「科学」は、現代文の最重要テーマの一つです。

ここでは、まず「科学」を語る上で最も注意すべき点について確認しておきます。

①科学の社会的な責任

i) 本当に安全ですか？

現在、科学を語る上で最も大切なのは、「人間」との関係です。

それを実感させたのは、やはり福島でしょうか。

原発は何重もの安全措置がとられているから安全なんだ、と言わっていました。

でも、それを誰が確かめたのでしょうか。

少なくとも、原発の周辺に住んでいる人たちに確かめる術はありません。

専門家たちが言っていたから信じた、というだけです。

それを「**安全神話**」と呼びます。

ii) 科学は人間とかかわらない？

科学と人間との関係を語るために、もう一つ、面倒くさい言葉を紹介します。

科学の「**没価値性**」。

「没」とは水に沈んでなくなること、「価値」とは値打ち、という意味ですから、科学の「没価値性」は、科学には値打ちがない、、、という意味だと考えてはいけません。

「値打ち」というのは、人や状況によって変わります。

私がもし山盛りの新鮮なパクチーを見たら、匂いもかぎたくないでの、思わず顔を背けることでしょう。

が、それにわざわざお金を払って食べる奇特な人がいるのを私は知っています。

人によって、パクチーの「価値」は違うのです。

でも、私ですら、空腹で何も食べるものがなかつたら、パクチーを食べるかもしれない。

状況によっては、食べ物としての「価値」をもつ場合もあるということです。

だから、科学の「没価値性」とは、科学の値打ちが人や状況によって変わらないことです。

「**価値中立性**」という表現もありますが、意味としてはほとんど同じです。

科学の「**客観性**」とか「**普遍性**」ともいいます。

科学が明らかにしているのは、人間と無関係に成り立っている、この世界のしくみだから、科学は、世界のどこでも、いつの時代でも通用する、という話です。

でも、それは本当でしょうか。

科学がこの世界のしくみを解き明かすことならば、それを解き明かしているのは人間です。

そして、解き明かしたしくみを使っているのも人間です。

どこまでも、科学は人間とべったりな関係に見えます。

その人間を引きはがすことなど、科学にできるのでしょうか。

にもかかわらず、人間を無視するなら、科学は根本的な矛盾を抱えているといえます。

iii) 水戸黄門の印籠

「水戸黄門」という昭和の時代劇をご存知ですか。

黄門様の印籠には、江戸時代の支配者であった徳川家の家紋が入っているのですが、その印籠を取り出すと、それまで争っていた人たちが一斉に土下座します。

「科学的」という言葉は、その印籠のようです。

それが通用しないことはフクシマで経験済のはずなのに。

現に、「科学的」という言葉は、私たちの不安を払拭したり抑え込んだりするのによく使われます。

そして、その「正しさ」をたしかめようがない私たちは、「科学的」という言葉の前に平伏してしまいがちです。

科学が、現代社会の《豊かさ》に不可欠なことは否定のしようがありません。

科学は人間生活と深く結びついているのです。

だから、科学、および科学者は、人類や社会に対して大きな責任を負っていることを自覚すべきです。

そして、それは、科学の恩恵を享受している私たちにもいえることです。

「科学的」という言葉にごまかされではありません。

私たちの生活を支えてくれているのが科学であるならば、科学に関することは他人事ではなく自分事なのです。

そこには人間、つまり私たち一人一人がかかわっていることを忘れてはいけません。

いやいや、専門的なこと、わからないし、と思った人。

自分が何のために勉強しているか思い出してください。

理科や社会、それに英語。

ネットには、いくらでも君が読める日本語や英語の論文が転がっていますよ。

iv) 科学と人間をつなぐために

といわれても、現実問題として、科学の専門的な知識など、なかなか縁遠いものです。

その意味で、そうした専門知識を教えてくれる人が要ります。

その役割を担わなければならないのがテレビや新聞を中心とするマスメディアであり、そこに登場する専門家や科学ジャーナリストです。

が、いわゆる新型コロナや地球温暖化を巡る報道を見ると、かなり危うさを感じます。

地球温暖化に関するIPCCのレポート、読んだことがありますか。

IPCCは、気候変動に関する政府間パネル、という国連によって作られた組織です。

そのレポートのなかでは、将来的に不確定なことが多いので、いろいろな場合分けがされ、それぞれに確率の幅を設けて、可能性が議論されています。

その可能性も、現在の研究でどれくらいしかといえるか、項目によって違うので、「確信度が高い」とか「確信度が中程度」とレポートに表記されています。

が、報道されるのは、最悪のケースばかり。

視聴者を煽るような内容ばかりです。

でも、私たち素人の側にも問題があるかもしれません。

たとえば、ウィルスは死滅しなくても、十分に少なくなると病気にかかる可能性はほとんどありません。

コロナ禍の最中に、そう良心的な専門家たちが発信しても、「十分に少なくなる」ことを「完全には死滅しない」、「ほとんどない」ことを「ありうる」と読み替えて、マスメディアは危機感を煽っていました。

こうした風潮に、「科学的」な説明はなす術もありませんでした。

逆に、フクシマの原発事故は、可能性として十分にありました。

それを専門家は丁寧に説明する必要がありました。

そして、私たちもそれをしっかり理解する必要がありました。

が、それをなぜか安全だと思い込んだ、、、

新型コロナの場合は「科学的」に安全であることが無視され、フクシマの場合は「科学的」に安全であることが盲信された。

こうした違いは、ある意味、無知から来る反応といえます。

私たちはそれを十分に知ろうとしたのか、専門家たちはそれを十分に伝えようとしたのか。

それを媒介することこそマスメディアの最大の役目であるはずなのに、実際は無知を助長するような報道を続けていたように思います。

包丁を使えば、けがをすることはあります。

科学を使えば、けがをすることがもちろんある。

恩恵ばかりではありません。

だからこそ、科学とは何か、私たち自身が十分に知る必要がありますし、マスメディアはそれを助けなければならぬはずです。

最後に、、、

パクチー大好きな人、ごめんなさい。